洛陽出土とされる三角縁神獣鏡:2015年11月の中国訪問実見報告

全国邪馬台国連絡協議会会長 鷲崎弘朋

中国河南省の古鏡研究家で鏡コレクターの王趁意氏(1949 年生まれ)が、洛陽発見とされる 三角縁神獣鏡を、2014 年 12 月に『中原文物』(河南博物院主編)に論文発表した。これは、 2015 年 3 月 2 日の朝日新聞で紹介された。ただ、現物を見た日本人はいない。そこで 2015 年 11 月下旬、大阪府教育委員会の西川寿勝先生と一緒に河南省鄭州へ赴き、日本人として初 めてこの鏡を実見した。

- 11月23日(月) 関西空港から上海経由で河南省鄭州へ。 鄭州は古代殷(商)の王都があり、今でも当時の城壁(土を固めた4km四方)が残る。 鄭州が吹雪のため着陸できず、400km離れた斉南市(山東省)へ。一晩、斉南市のホテル に泊まる。
- 11月24日(火) 悪天候のため、飛行機がなかなか飛ばない。夕方ようやく斉南空港離陸。 鄭州着後タクシーで40kmの雪道を約2時間かけて夜九時頃にホテル着。丸1日のロスと積 雪のため、洛陽市漢魏洛陽城付近の白馬寺付近(鄭州の西)および曹操墓(鄭州の北)の 見学を断念。
- 11月25日(水) 午前、王趁意氏の自宅(公務員宿舎)を通訳同伴で訪問。 奥様と友人(鏡研究の仲間)合計3人が出迎え。王氏自宅で終日を三角縁神獣鏡とその他 古鏡の撮影や意見交換などで費やす。洛陽出土とされる三角縁神獣鏡を実見し写真を撮る。 西川先生が実測、直径約18.3 cm。重量を測る(約680g)。また、形状も調べた。間違い なく三角縁神獣鏡である(「吾作」で始まる三角縁四神四獣鏡)。この鏡は王趁意氏の個人 所有で現在も自宅に保管している。以下、意見交換など。



王趁意氏提供の三角縁神獣鏡



三角縁神獣鏡を手に持つ鷲崎弘朋



王趁意氏が重さを測る:約680g



西川寿勝先生が形状を調べる

○出土地点

出土地点・出土状況を突っ込んで聞いたが、結局はっきりせず。王趁意氏は漢魏洛陽城付近の10km四方(白馬寺あたり)のどこからか出土したとするのみで、明確な答は無く口を濁した。出土状況や共伴物の情報も無い。



洛陽付近地図 (西川寿勝先生資料より)



漢魏洛陽城・白馬寺付近(西川寿勝先生資料より)

○入手時期

2015年3月の朝日新聞報道では、「2009年ごろ、当時、洛陽最大の骨董(こっとう)市で、市郊外の白馬寺付近の農民から譲り受けた」とのことであったが、今回の面談では「2007年ごろ」との説明があった。

○鉛同位体比分析

訪中に先立ち、鏡の鉛同位体比分析が可能か王趁意氏に打診しており、可能性がありそうなので、西川先生がサンプル採取のキットを持参した。ただ、実際には王趁意氏から「河南省の上層部に事前に相談したが、【もっと上のレベルでの日中合同プロジェクトというようなプラットフォームをまず作り、それから鉛同位体比分析をすべき】との回答があったとのことである。従って、今回は分析用のサンプル採取は断念した。

○三角縁神獣鏡を実見して(写真参照)

ここでは、鏡を実見しての鷲崎の感想を記す。なお、西川レポート『洛陽発見の三角縁神 獣鏡実見報告』(2015年12月24日、日本書紀研究会で発表)も参照の事。

① 日本で約560 面発見された三角縁神獣鏡と共通点が多く間違いなく「三角縁神獣鏡」である。直径20~22 cmが多いのに対し、今回の鏡は18.3 cmとやや小ぶりだが許容範囲。



② 銘文帯の幅は広く 31 文字は大きい。また極めて鮮明で欠字や読めない字は無い。 銘帯は「吾作明竟(鏡)真大好 上有聖人東王父西王母 師(獅)辟邪口●巨 位至公卿 子孫壽」の長文を刻む(●字は「街」の真ん中「圭」が→「金」)。

鷲崎が今まで見た古鏡はそう多くはないが、その中では銘文が最も鮮明。11月27日(金)に鏡4000枚を個人所有するコレクターの鏡700枚を鄭州の自社ビル展示場『未来銅鏡芸術館』で実見した。その中で漢・魏晋朝時代の銘文入り鏡の約10枚も実見したが、これら

と比較してもこの三角縁神獣鏡の銘文は格段に鮮明。

③鏡の下地から銘文の立ち上がり幅は狭い(文字の肉厚は薄い)。だが、立ち上がりの鋳崩れは無く、また銘文の文字の高さはほぼそろっている。更に、文字の表面は凸凹が無く人工的にカンナで削ったような平滑感があるのも多い(光るぐらい)。















③ この鏡は中原の出土鏡特有の硬くて厚い赤サビが随所に見受けられる(特に表の鏡面)。 日本出土の鏡のサビは土壌水分と塩分の影響から製作時の光沢は失われ緑青による錆化 がはなはだしいものが多い。西川先生はこの「赤サビ」から考えると、この鏡は中国「中 原」産で、日本から持ち込まれたものではないと説明され、これはかなり説得力がある。 ただ、銘帯および付近にはサビ特に「赤サビ」が少なく、そのおかげで銘文が非常に鮮明 で、文字を読みにくくするサビは無い。このように、銘帯にサビが非常に少ないのは不思 議である。これは、表「鏡面」と背面「文様面」の写真を比較すると明らか。 ④ この鏡は中原の出土鏡特有の硬くて厚い赤サビが随所に見受けられる(特に表の鏡面)。 日本出土の鏡のサビは土壌水分と塩分の影響から製作時の光沢は失われ緑青による錆化 がはなはだしいものが多い。西川先生はこの「赤サビ」から考えると、この鏡は中国「中 原」産で、日本から持ち込まれたものではないと説明され、これはかなり説得力がある。 ただ、銘帯および付近にはサビ特に「赤サビ」が少なく、そのおかげで銘文が非常に鮮明 で、文字を読みにくくするサビは無い。このように、銘帯にサビが非常に少ないのは不思 議である。これは、表「鏡面」と背面「文様面」の写真を比較すると明らか。

表(鏡面):赤サビが非常に多い



背面(文様面):サビが少なく銘文が鮮明

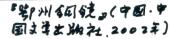


なお、この「赤サビ」について安本美典先

生は、日本(椿井大塚山古墳)や中国江南地方でも、赤サビのある鏡が出土していると反論 している(以下の鏡)。

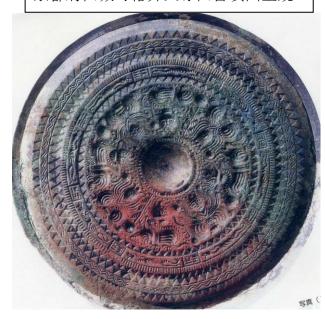
鄂州铜镜

南中国出土鏡でも赤さか





圆形,圆钮,圆钮座。座外九乳 钉均布一周。六乳钉将纹饰分为六 组,分别为青龙、白虎、朱雀、玄武、麒麟、羽人,其中两组合为羽人导 龙。外为铭文一周:"尚方作竟大毋 伤,巧工刻之成文章,左龙右虎辟不 羊,朱鸟玄武顺阴阳,子孙备具居中 央今。"边纹为两周锯齿纹中挟一周 波折纹,1986年鄂州市朱家城第1 号吴墓出土,直径15.6cm,边厚 京都府山城町椿井大塚山古墳出土鏡





圆形,圆钮,圆钮座。绞饰为四乳 钉间以青龙、白虎、朱雀、麒麟变异四 神,边纹为锯齿纹两周。1964年5月鄂 州市新庙司徒村出土,直径12.7cm,边厚0.7cm。



⑤ 今回の訪中は大きな意義があり。これを第1回として交流を続けたい(皆さん一致)。



左より西川寿勝、王趁意、鷲崎弘朋



右より西川寿勝、王趁意の奥様、王趁意 王趁意の鏡仲間、鷲崎弘朋:王趁意氏の自宅にて

午前中は、王趁意氏の自宅を再度訪問。西川先生が前夜 25 日にまとめたレポートを王趁意氏へ報告し意見交換。

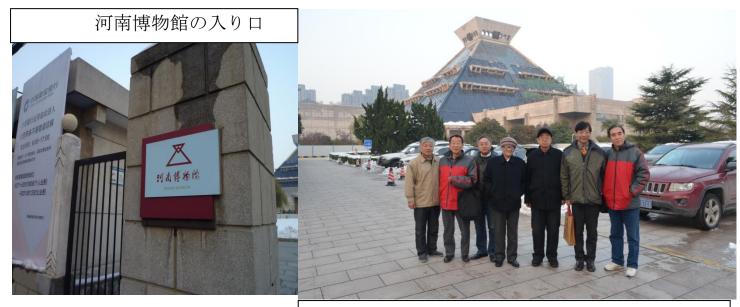
午後は王趁意氏の案内で河南博物館を訪問し、郝本性氏(河南省文物考古研究院原院長)、 湯氏(同、評価委員会の長老)の2人の長老、および張鍇生氏(河南博物院研究館員・『中原文物』副主編)とお会いした。西川先生が前述レポートを説明し意見交換を行い、2人の長老はうなずいていた。印象的なのは最後のコメントで、

(湯氏) 科学的測定は重要である。昔はなかったが、1980年代から鉛同位体比分析などが出てきた。今後、こういうものを利用すると良い。

(郝氏)研究を行い、結論を出し、発表するのは良い事だ。



西川先生が郝先生・湯先生に説明:11月26日、河南博物館



右より王趁意、西川寿勝、郝本性、湯、張鍇生、鷲崎弘朋 王趁意の友人(鏡研究家):11月26日、河南博物館にて

11月27日(金)

午前中は前述の鏡コレクター所有 4000 枚の中の 700 枚の古鏡を『未来銅鏡芸術館』で実見した。なお王趁意によれば、河南省には鏡コレクターが多く、この他にも 3000 枚を所有する人が 3 人もいるとのことである。





昼頃の便で鄭州から上海・関西空港経由で羽田空港へ。なお、29日(日)は羽田から福岡へ飛んで久留米市での全国邪馬台国連絡協議会「第二回全国大会」に出席した。翌30日(月)には高良大社を訪問し、竹間宗麿宮司の案内で宝物殿に入り、大社所有の神鏡「三角縁神獣鏡」(祇園山古墳出土と言われる)を実見した。銘文は6文字(日、月、天、王、田、目)が認められるが、今回中国で実見した鏡とは鮮明度に大きな差がある。

高良大社所蔵の三角縁三神三獣鏡(鷲崎撮影) 中世以来、高良大社の神鏡として伝えられてきた。 直径約 20 c m。 銘文 6 文字は読みづらい





右より犬竹正明東北大学名誉教授、谷口健彦・奈良纏向地主、竹間宗 麿高良大社宮司、上杉邦憲 JAXA名誉教授(上杉家第17代 当主)、鷲崎弘朋。全員が全国邪馬台国連絡協議会の会員

《最後に》

今回訪中での西川先生「三角縁神獣鏡の実見」については、12月16日の読売新聞に始まり、かなりの新聞・テレビが報道している。ただ、この三角縁神獣鏡の出土地点・出土状況が依然として不明という事が影響し、慎重な意見を述べる専門家が多い。

- ●「写真では文様や銘文にやや違和感があり、自分の目で確かめるまで価値判断ができない」 (菅谷文則・橿原考古学研究所所長)
- ●「出土状況が分からず、日本から後世に渡った可能性もある」(福永伸哉・大阪大教授)
- ●「本当に洛陽からの出土品か分からず、確かな出土地の議論が今後必要」(岡村秀典・京都 大教授)
- ●なお、安本美典・元産業能率大学教授は、2015 年 3 月の朝日新聞記事を受けて、季刊『邪馬台国』125 号(2015 年 4 月)で「これは現代の捏造鏡だ」と論評した。2016 年 1 月 「邪馬台国の会」の討論でも、本物説を主張する西川先生と激論となった。

ただし、その後、以下の中立的なマスコミ報道がある。

●「出土状況が不明なため資料価値を全否定する見解もある。私も最初はそう思ったが、興味深い論争を一歩前に進める機会になるかもしれないと考えを変えた」「厳密な発掘による資料だけが考古学の材料ではない」「中国側は問題の鏡の分析で、日本の国家機関の参加を望んでいるという」(3月2日毎日新聞伊藤和史記者)

このように、王趁意氏が「洛陽出土鏡」とする今回の三角縁神獣鏡は、出土地点・出土状況が不明のため、「1700~1800年前に洛陽で製作された出土鏡」とする決定材料が乏しい。 一方では、「後世に日本から渡った鏡」「現代の捏造鏡」と断ずる証拠も無い。旧石器捏造事件の時のように捏造現場を写真撮影したわけではない。

鷲崎個人としての心証では「偽物説」に賛同するが、現段階では結論を出すのはまだ早く、 更なる調査と検証が必要と考えられる。特に、鉛同位体比分析とか三次元計測など、客観的 説得力のある科学的分析が重要であろう。

以上